



研究集録14

神戸大学教育学部附属養護学校

(Citation)

研究集録, 14:0, 2-9

(Issue Date)

1988-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009915>



研究集録 14
(昭和62年度)

1987研究・実践 障害児教育の創造

神戸大学教育学部附属養護学校

も く じ

はじめに	学 校 長	1
昭和62年度研究実践活動の概要	研究推進委員会	4
• 研究推進の方針	• 経過	• 総括
1. 昭和62年度本校教育の概要		
(1) 本校の役割と任務、教育目標、教育方針		11
(2) 教育課程編成上の諸問題		
① 小 学 部		12
② 中 学 部		15
③ 高 等 部		18
(3) 教育課程の構造と日課表、集団編成		20
(4) 児童生徒の障害と発達、生活実態の状況		22
2. 第8回障害児教育研究協議会の報告		
(1) 研究協議会大要 日程、公開授業一覧		37
(2) 全体会報告概要		38
(3) 分科会別研究協議の報告		
① 小 学 部		43
② 中 学 部		58
③ 高 等 部		65
(4) 研究協議会の総括		71
3. 教科教育・教科外教育の実践報告		
(1) 「生活」の実践		
• 「生活」のねらいと題材一覧		75
• 実践報告「障害の重い児童の『畑づくりのとりくみ』をさがって」		76
(2) あそび・ことばかず、国語、数学の実践		
• 課題別グループの編成、そのねらいと指導内容		82
• 実践報告「話ことばにつながる力の獲得をめざして(2)」		85
• 実践報告「ことばにつながる力を育てるために」		91
• 実践報告「劇あそび『おおかみとこやぎ』」		97
• 実践報告「なかま集めをしよう」		104
• 実践報告「中学部 Aグループの課題と授業づくり」		112
• 実践報告「色や形の分類、対応、分析・総合する力を高めるために」		117

・実践報告「数への導入をめざして—『数あそび(いち、に、さん)』—」	124
・実践報告「自閉的傾向を示す生徒のことばの指導を考える」	129
・実践報告「生きた力につながる『国語、数学』をめざして」	134
・実践報告「実生活につながる国語、数学の取り組みをめざして」	141
(3) 音楽の実践	146
・ねらいと題材一覧	146
・実践報告「学習発表会 — なかよし広場 — の取り組みについて	147
・実践報告「音楽のとらえ方に視点をあてて」	152
(4) えがく・つくる、美術の実践	158
・ねらいと題材一覧	158
・実践報告「卒業共同制作のとりくみ」	160
(5) 体育の実践	166
・ねらいと題材一覧	166
・実践報告「『リズムあそび』— 授業づくりをふりかえって」	167
・実践報告「子どもたちが意欲をもって — マラソンのとりくみ」	173
(6) 家庭の実践	180
・ねらいと題材一覧	180
(7) しごと、生産の実践	
・しごと、生産集団編成と、そのねらい、指導内容	181
・実践報告「粘土の授業の中で見通しを」	184
・実践報告「竹を素材にしたのれんづくりの実践」	189
・実践報告「ねんどでつくる — ひもづくり — 流しこみ — 板づくり」	195
(8) 特別活動の実践	201
・ねらいと題材一覧	201
・実践報告「全員でとりくめる運動をめざして(サーキット走)」	203
・実践報告「劇『ゆきんこ』のとりくみ」	208
・実践報告「劇『セロひきのゴーシュ』のとりくみ」	218
(9) 養護・訓練(からだ、療育)のねらいと指導内容	226
4. 学校行事のとりくみ	227
5. 保健指導のとりくみ(特別活動における保健部のかかわり)	233
6. 進路指導のとりくみ(現状と課題)	235
7. 教育実習指導のとりくみ(実際と諸課題)	252
8. 入学選考のとりくみ(実施と諸問題)	263
9. おわりに	269

昭和62年度 研究実践活動推進の方針

1987.4.6 研究推進委員会

—— 障害と発達、生活実態に視点をあてた ——

科学的・系統的・民主的な 教育実践の創造と発展をめざして

1. 研究推進の基本的な方針

「人間を教育するとは、かれのなかに見とおし路線を育てることを意味している。」

(ア・エス・マカレンコ)

人格形成のうえで、「見とおし」ということが最も重要な意味をもつとマカレンコは言っている。こどもたちに、それぞれの発達段階に応じた確かな見とおしの力を育てることはもちろん、我々の教育実践を、目的意識性の面でも、系統性計画性の面でも、また、こどもや父母の要求に応え、教師一人ひとりの願いや思いを内包した教師集団の共通理解といった共感性からいっても、明日への、将来への見とおしにそった豊かな内容をもったものにふくらませることは、研究実践上の重要課題である。

教育目標やとりくみの目的を研究検討することは、教育実践の目的意識をより人間的に価値のあるものに高めていくために必要であるし、こどもの実態、父母や地域の教育要求との関連により具体化した内容に創りあげていくことが求められている。

附属学校としての本校の役割と任務は、①精神発達遅滞児に対する教育実践と研究を推進する、②学部(大学)の研究と教育に連携し学部学生の教育実習を行う、③地域の障害児教育の一端になう、という三点が確認されてきている。また、教育目標として「児童、生徒の身辺生活の確立と、社会生活への自立を展望し、障害を軽減、克服する力の育成をはかりつつ、諸能力の獲得と豊かな人格の形成をめざす」ということがかけられている。

これらの課題を具体的に追求していくためには、こどもたちの「発達段階に即し、障害に着目し、生活実態に根ざした」実践を志向し、それを積み重ね、とりくみの具体的事実を明らかにしていくことがまず重要である。

そして、その実践を、教師一人ひとりの意図、思いといったものも含めた目標との関連、計画性の面から、また、他の領域やとりくみとのつながりの点から分析して総括する、そのことが研究実践活動の重要な中味である。

こどもの実態と父母などの教育要求の分析→教育目標、実践目標の設定→実践の計画→実践→総括→実態や教育要求のとらえなおし→目標の検討→・・・といった流れの中で、先行の理論や実践からも学び、我々教師集団や学校をとりまく教育関係者などからひろく英知を集め、実践の質を高めていく、これが、実践研究の方法である。

したがって、そういった研究実践を進めていくための、教師集団づくりや、条件整備が急がれなくてはならない。様々な困難や矛盾のある中で、それをのりこえ克服する展望（見とおし）を明らかにすることも必要である。また、実践研究の発展のためには、自主、民主、集団、公開の原則にそった研究活動が展開されなければならない。

2. 研究推進の具体的な方針

1) 研究推進委員会の組織と運営、任務について

- 本校の研究実践活動全般を、円滑に推進し、指導していく全校的な任務を負うものとして本委員会は組織されている。副校長、各学部主事、各学部委員、（校長）で構成し、委員長は互選する。委員長は委員会を統括する任務と、対外的には県養研の理事など、研究活動に関して本校を代表する任務を負う。学部の委員は、学部研究の推進と同時に、全校的に必要な任務を分担する。
- 定例の委員会は月一回設定する。必要に応じて臨時に委員会を開催する。
- 研究実践活動が見とおしをもって円滑に進められるよう、それにかかわる情報を教官全員に伝えるという趣旨で、「研究推進ニュース」を発行する。

2) 学部研究の推進（学部会、学部研究会）

本校教育実践の基盤である各学部での討議、協議は、研究実践活動の中心に位置づくものである。日々の授業実践や行事など、児童、生徒の学習教育活動に直結した多くの課題や内容を含んでいる。

近年の各学部での研究実践課題については以下のようなものである。

小学部では「発達段階が1才半前後のこどもに対する教育実践」ということにおよそまとめられ、発達の質的転換期に着目した実際のとりくみや、教育課程の構造、日課と生活の流れ、身近生活力の獲得などの内容がひきつづき課題となるであろう。

中学部では「思春期をむかえた障害児の指導」に関して、生徒の実態把握の方法や、学習集団編成と集団づくりの問題、自閉的傾向を示す生徒をはじめとして、その発達像、障害像が変化する時期に対応した指導のありかたが、ひきつづき課題であるし、小学部からのひきつづき課題と、高等部、そして社会生活への展望の中で、たとえば「あそび的課題から労働や

社会生活へとつなげる学習指導内容」といったことも検討の必要なことからである。

高等部では「青年期に達した障害児・者の発達課題、労働と教育の結合」といえる内容で、特に生活年齢との関係で発達段階の低い生徒の指導内容の検討や、進路や卒業後の社会生活を見とおした指導内容の設定と充実が求められていると言えよう。

各学部の研究課題の設定については、言うまでもなく、学部の自主性をふまえ、研究推進委員会としても、全校的な観点から協議検討し提言していきたい。

① 教育目標、教育課程の検討

小、中、高一貫教育と学部の独自課題の追求との関連をふまえ、目標のより具体化と教育課程、実践内容との整合性を追求する。

② 児童生徒の実態把握

「教育実践カルテ（個人）」については、記入の観点、集団討議の方法など、検討を加えながら、作成、活用していく。

発達検査、発達診断については、新版K式発達検査、遠城寺式発達検査、高等部の発達チェック表などの活用をひきつぎ、検査結果の判断について集団討議を充実させ、実施方法についても検討を加える。

「障害」の把握と配慮事項について、個別に整理検討し、共通理解をはかる。

生活実態についても、個別に整理し、指導上の配慮事項に関して共通理解をはかる。

③ 指導計画の作成

授業を組織するにあたっての目標やねらい、指導内容や配慮事項などの共通理解をはかるため、授業ごとに作成し、集団で討議する。

④ 授業研究

学習指導案の検討とあわせて、授業観察の視点を明らかにし、それにそった事後研究を充実させる。授業研究会は学部独自で、また、全校的に計画設定する。

⑤ 実践の総括

授業実践記録、研究集録を例年どうりまとめる。実践記録の検討の方法や記述の様式についても検討を加える。

⑥ 授業の準備、教材研究

個人の力量まかせにしないで、集団で論議し準備する工夫が必要。

3) 全体（全校）研究会の実施

学部にもたがう問題や、より全校的な視野にたつて、共通理解をはかるべき内容について

論議する。

今年は、研究協議会を実施する年でもあるし、特にその準備もふくめて必要性が大きい。

以下の計画で実施したい。（詳細は追って提案）

- 学部研究のとりくみと、研究協議会にむけて（６月）

教育学部特殊教育研究室その他の指導をうける。

- 学部研究のとりくみと、研究協議会の提案内容について（１０月、１１月）

県教育委員会、指導助言者、司会者とも協議。

- 総括研究会（３月）

4) 自主研究会

本校教育の課題を、全校や学部の単位だけでは補えない内容や、独自の専門的領域の研究を自主的に組織し、自主、民主、公開、（集団）の原則にそって運営する。

研究推進委員会としては、グループを組織する際の援助、研究時間と予算面での援助を行う。

5) 研究集録 14 の刊行

今年度の研究実践活動のまとめを「研究集録 14」として刊行する。

編集方針、内容などについては、意見を集約し追って提案する。

Ⅱ 対外的な研究会の実施について

1) 県教育委員会との合同研究会

これまでの経過をふまえ、実施の意義、ねらいを相互に確認し、事前の協議を充分につくして行う。今年度は研究協議会へむけてのとりくみの一環として位置づける。

2) 教育学部教官との合同研究会

実践と理論との結合の課題においても、本校が教育学部の附属校であることからしても、学部研究室との連携は必要不可欠である。これまでの経過から困難も予想されるが、今年度は研究協議会へむけてのとりくみの一環としても位置づけ、はたらきかけをつよめる。

3) 第 8 回研究協議会

「隔年実施」という方針に基づき、今年、１１月 20 日（金）に実施する。「研究発表会」ではなく、「研究協議会」であることの意味や、今回の独自の課題や実施目標についてひろく意見を集約し、意義の大きい協議会にしていくことが望まれる。

なお、準備、運営などについては、実行委員会に委ね、研究推進委員会としては日常の研究活動も重視してとりくみをすすめる。

4) その他

近隣の学校、施設、関係諸機関との「交流」をふくめた研究をとおしてのつながりを可能なかぎりつよめる。

4. 研究推進を支えるその他の任務について

1) 研究出張について

研究出張の機会の保障は積極的に行う。出張旅費の執行については具体的な指針を追って提案する。

2) 研究図書、研究室の整備充実について

- ・図書購入希望を定期的に集約し、研究推進委員会が調整して充実させる。
- ・夏期休業中に書庫の整理と図書の点検を行う。

3) 研究実践資料の整備

- ・昭和63年には本校創立20周年をむかえる。20年間の実践と研究の資料を整理保管する準備を継続して行う。

昭和62年度 研究実践活動の総括

1988.3.16 総括研究会

1. 「研究推進の基本的な方針」に照らして

私達の日々の教育実践と研究が、どれだけ見通しと確信をもってすすめられたか、また、それが、児童、生徒の実態をふまえた、発達課題をおさえた、合理性、計画性にそったものであったかどうか、さらに、その内容が、子どもたちの「要求」から出発し、子どもたちとの共感関係を基に指導者間の共通理解を深めるものであったかどうか、ということが研究実践の総括をすすめる上での重要な視点である。「科学的・系統的・民主的」な教育実践の創造と発展をめざすということは、そういった視点にたって、ひとつひとつの実践をふりかえり、反省点も含めて蓄積していくことを全体的課題として提起したものである。

その、とりくみの方向を年度当初に提起したのが「基本方針」であるが、今年度は、第8回研究協議会を節にして、各学部で、また、全校的に諸課題を一定整理し提起することができた。実践の積上げの不足や、克服しなければならない多くの困難、条件を残しつつも、現在の到達を示すものが、教育課程であり、その改善の内容に研究実践の過程が反映されている。そして研究の体制や、実践の分析と蓄積をはかる諸資料の作成といった研究の方法についても、「基本方針」にそってすすめられてきた。次年度以降も、「基本方針」そのものの論議も重ね、実践していく

なかで、深めていくことが必要である。

2. 研究推進の具体的な方針にそって

組織の構成は現行の方法が、その任務内容からして妥当と考える。今年度は、研究協議会開催の年であったが、前年度の委員8名のうち6名が交替した。協議会隔年実施の趣旨を生かすためには、今後、配慮する必要がある。

「研究推進ニュース」の発行が滞ったのは最大の反省点である。「必要に応じて」では忙しさに流されてしまう。委員長の責任で深く反省する。

学部研究の推進（学部会、学部研究会）については各学部研究の総括に委ねる内容であるが、委員会としては、今年度は、研究協議会との関連で、各学部のテーマや、協議内容についての論議は一定行うことができた。しかし、研究方法については、殆ど学部まかせの状態で終わってしまった。単に学部研究日の設定だけではなく、授業の準備やまとめ、実践の記録検討を充分行えるよう、条件整備など、委員会としてでも提言していく必要がある。

全体（全校）研究会は、総括研究会を入れて3回実施した。研究協議会の提案内容については1回は司会、助言者との打合せになり、学部独自の時間設定をするなど工夫されて実施された。次年度は、全校的にも、「授業研究会」などの内容を含んだとりくみなど、創意をもって計画できればと考える。

「自主研究会」については、再編成をおこなってとりくんだが、年間を通して、設定された時間がきわめて少なかった。各グループで、とりくみの時間など一層の工夫が必要な状況である。

3. 対外的な研究会の実施について

第8回研究協議会が一定の成果をおさめ、それにむけてのとりくみも含め、対外的に研究内容での交流ができた。しかし、学部研究室、教育委員会とも日常的につながりをもっていくことはまだ、困難であった。

来年は、研究協議会を実施しない年であるが、県教育委員会、及び教育学部との合同研究会などは、計画的に実施し、積上げをはかる必要がある。

なお、来年、兵庫県精神薄弱養護学校研究協議会の「小学部会」を本校で開催することを要請されている。県下の養護学校間の交流の機会として、積極的にとりくむことを提案する。

4. 研究推進を支えるその他の任務について

研究旅費は、「学習会」以外の項目で予算より大幅に少ない執行になった。定期的に研究図書購入希望を集約した。定期発行雑誌も含め、計画的購入の検討も必要である。教育実践記録、教育実践カルテなどの保管、過去の資料の整理充実が、継続して必要である。

（文責 研究推進委員会委員長 井沢 孝典）